

## 「主観性」の文法的定義と直示中心 デロワ中村弥生

日本において早くから松下大三郎、時枝誠記、金田一春彦による「主観的表現」についての議論があったことは周知の通りであるが、一方で、「主観性」あるいは「主観的」という概念が漠然としていて術語として文法的な位置付けがなされていないといった理由から日本語研究においては批判されることも多い。このような現状を踏まえ、本発表では、話者とは異なる「直示中心 (deictic centre)」の概念を用いた「主観性表現」の文法的定義を提案する。日本語には、益岡隆志 (1997)「表現の主観性」(田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版)における「主観性述語」など意味素性として「主観性」という特性を持つと考えられる語が存在することから「主観性」が語の意味素性として定義できると考える。西尾寅弥 (1972)「形容詞の意味・用法の記述的研究」(『国立国語研究所報告』44, 秀英出版)や Kuroda, S. (1973) “Where epistemology, style and grammar meet: A case study from the Japanese” (Kiparski, P. and Anderson, S. (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, 377-391. Holt) により主観性述語は経験主体を一人称に制限することが指摘された。この人称制限とよばれる文法的制約を、述語が [経験主体=直示中心] という意味素性を持つと言い換える。直示中心とは、直示表現の意味を決定する基準となる点である。すべての発話は、直示中心を備えており、それは発話場面に常に存在する唯一の要素である話者に初期設定されている。このような意味素性を用いて、主観性表現を「直示中心がパラメータに設定された意味素性を持ち、解釈に直示中心が介入する表現」と文法的に定義することが可能となる。また、この直示中心が環境により移動すると考え、複文構造や談話レベルにおいて人称制限が無化する現象などを直示中心の移動という概念を用いて分析する。さらに、これまで同様の現象を分析するのに多く用いられてきた視点という用語についてその問題点を指摘する。今後は直示中心とその移動によって分析可能な現象とそうでないものをより詳細に調査し、その理由やメカニズムを解明したい。